

11 月総評

今月は鋭敏な感受性が感じられる作品に多く出会った。惹かれた作品をいくつか紹介したい。

寒晴の少女コントラバス背負う

長谷川柊香 宮城県

コントラバスを背負う寒晴の少女の情景でしかないけれども、それぞれの読者には少女の背景までもが想起される。それを想起させる装置は、少女のあとに置かれた切れ（空白）によるものといえるだろう。

ピアノだけ溶けずに残っている
水槽

まちりこ 埼玉県

残るのがピアノだけという情景は、ひとつのことに打ち込んだことがある人なら一度は憧れるに違いない。音楽以外何も望まないピアニストの姿が思い浮かぶ。

知らないにおいになった父の枕

浅葱 愛知県

大人になるということは、父のにおいが知らないにおいになるということだろう。そして同時に、いつの日か父を許すことが出来るような日が来るということを読者へと伝えるのだろう。

ひらがなと言う名の

さかながおよぐとき
君の返事もさざなみになる

旭日 百 滋賀県

『君の返事も』と書かれているので、返事に対する問いも、きっとさざなみになったのだろう。ひらがなと言う名のさかなは、どこまでもやさしくこの世界を泳いでいるかのようである。

雨っすね 雨くらい降る星にいて
あなたは雨をじっと見ている

白野 新潟県

ぶっきらぼうな口調の中にも、あなたへの愛情とあなたまでとの距離を感じる。

文化の日どこまでも
どこまでもどこまでも公園

立花ばとん 東京都

文化の日という堅苦しい祝日が、どこまでもつづく公園に置き換わる。『どこまでも』という繰り返しの3回で簡単に置き換わることで、文化の日は重さを失くして、公園の一部になってしまうかのようである。

夜はいい
ふるい平屋の軒先の
鉢植えのパンジーが鋭利で

松下 誠一 東京都

パンジーは堇科の植物で、決して鋭利ではないのだけれど、それが鋭利になる夜とはどんなだろうと思う。そしてそんな夜を好む呟きの主体も。

輪郭が隠れるように
横髪を切ってもらって
うまれた三日月

豊富 瑞歩 茨城県

髪を切ると、新しく生まれる髪や肌の形があって、たとえばそれは横髪のせいだったりする。輪郭が隠れるようにというのはささいな願いだけれども、当人にとっては大きな問題なのかもしれない。描かれるゆるやかな時間のたいせつさを思う。

夜ふかしの小瓶を棄てる音のあと

奎いう子 佐賀県

音で終わらずに、敢えて『音のあと』とまで書くことで、音はないものになってしまう。そうすれば、夜ふかしをしたことも、小瓶を棄てたことも、ないものにしてくれるだろうか。

私の小さなかかとが、
街の形に凹んでいるよ

こはくいろ 大阪府

ひょっとすると街の形は小さなかかとは窮屈すぎるのかもしれない。そして、小さなかかとを応援したくなるのはそんな理由があるからなのかもしれない。

ハンモック空を素数の溢れ出す

藤 雪陽 長野県

空と素数の押韻が心地よい。『空に素数』のでも意味は通じるけれども、敢えて『空を素数の』とすることで、あふれんばかりの素数のイメージにつながる。

見渡す限りの教室だった

土田 真央 滋賀県

主人公の今の閉塞感を表すかのような作品。同じ作者の作品に『はんぶんは冬蝶の眼にあ
ずけたわ』というのがあるが、こちらの作品は、自身の喪失を表現しているようにも読める。